

[J. Oriental Inst. Baroda, 32(3-4), 230 (1983)]

Simile in Philosophical Writing (I)

SHOUN HINO

インド古典における喩例 (I)

日野紹運

インド古典文献において、喩例 (*dr̥stānta*) は「既知のものに基づいて未知のものを確定する。(*dr̥stāc ca adr̥sta-siddhiḥ*)」を真髄とし、究極実在・宇宙観等の論議に重要な役割を担っている。喩例には、同一の喩例が同一の学匠によって異なる目的で異なる文脈で用いられる場合、複数の喩例が同一の学匠によってある特定の目的に用いられる場合等がある。本稿ではある特定の喩例が何人かの学匠に様々な解釈される場合を取り上げた。

ところで、ヒンドゥー教の核となっているヴェーダーンタ哲学はヴェーダ聖典を真理としてその絶対的権威を認める。聖典は聖仙の靈感によって悟られた(聞かれた)「天啓」である故に、必ずしも組織的体系的に説かれてはいない。従って天啓聖典の真理は様々な解釈される可能性を包含していた。事実、ヴェーダーンタ哲学の膨大な大系は、天啓聖典の解釈学としての発展の歴史と言って過言ではない。この意味で天啓聖典に説かれた喩例の解釈学的研究はヴェーダーンタ哲学研究の重要な課題のひとつである。

本稿では、天啓の一『プリハッドアーラヌヤカ・ウパニシャッド』2.5.15 の車と轂・輻こしきの喩例を取り上げて、ヴェーダーンタの三学匠、シャンカラ(不二一元論)、スレーシュヴァラ(シャンカラの直弟子)、バルトリプラパンチャ(不一不異論)、による同喩例の解釈について論じた。これは、また、著作が現存せず、スレーシュヴァラ等の著作に言及されているだけの幻の学匠バルトリプラパンチャの教説の再構築にも示唆を与えるものである。